

お前は自分を一体何様

ハリリー・パルマー

時として、言葉の慣用的表現となっているものの中には、一般的な用法がほのめかすより遥かに高い真理の認識を反映しているものがあります。

「お前は自分を一体何様だと思っているんだ？」というのもその一例です。

そう発言する人の意図はおそらく、その相手に「どういうわけか思い違いをしていて、自分ではないものを自分だと思っている」と伝えることでしよう。

「お前は自分を一体何様だと思っているんだ？」それは質問というよりは告知です。多くの場合、その後には「お前が何だか私が教えてやろう・・・」といった意地悪な評価が続きます。

相手を痛めつけてやろうという意図は別にし、そう発言する人は少なくとも、アイデンティティーとは出来事や物理的外見よりむしろ考えや思いに関係するものだということを、おぼろげには理解しています。そしてその点では、その人は重要な真実を伝えています。

アイデンティティーには少なくとも2種類あります。一つは意図的なアイデンティティーで、それはその人が創造した通りに存在し、その人が創り続ける間だけ存在するものです。これが役割です。もう一つはしつこいアイデンティティーで、ほんの僅かに修正が加えられてはいるものの、過去に創り出された時と同じままで存在しているものです。しつこいアイデンティティーは、本人の意志によるコントロールとは無関係に存在し続けているように見えます。これが自己です。

・・・アイデンティティーとは、出来事や物理的外見よりむしろ考えや思いに関係するものです。

反応するしつこい自己であろうと意図的に実践されている役割であろうと、アイデンティティーは人生の経験をふるいにかけて、刺激し、解釈する役目を果たします。それは何が正しく何が間違っているか、何が善であり何が悪か、何が満足をも

たらし何が苦しみをもたらすか、といった価値判断を下します。それ（アイデンティティー）は他人の行動や人生の出来事にどのような意味を与えるかを決定し、刺激に対する感情的反応がある場合には、それがどんな反応になるかを決めます。どんな印象が現実と呼ばれ、どんな印象が錯覚と呼ばれるかを決めます。何が知覚可能で、何が目に見えないままかを決めます。それは何が可能かを決定します。それは達成とは何かを決定し、物理的肉体の構造を決定し、健康や不健康の度合いを決めます。

意図的な役割としてのアイデンティティーは、考えや記憶や想像を総合して<今>という瞬間に存在が創り出しているものです。それは精神的指紋のスナップ写真のようなものです。存在がこうしたアイデンティティーを創り出す必要があるのは、そういうアイデンティティーとして認識してもらいたい時だけです。創り出されたアイデンティティーは、過去のある瞬間のアイデンティティーにそっくりなこともあり、それがアイデンティティーが継続しているという印象を与えることで他人から認識されたり予想されたりすることを可能にします。あるいは全く新たなアイデンティティーが新たな瞬間の考えや記憶や想像によって生み出される場合もあり、それがその人は変わったというメッセージを送ることになります。すると「お前は自分を一体何様だと思っているんだ？」という反応を引き起こしやすいのです。これは言い換えると、実は「お願いだから、私が創り出していた通りのあなたとして自分を創造することに、再び戻ってくれないか？」というのと同じことです。

しつこい自己のアイデンティティーもまた精神的指紋のスナップ写真なのですが、それは鋼鉄に刻み込まれているようで、少なくともアバターが発見される以前は、変更不可能なように見えました。

健康で、しつこいアイデンティティーからは自由で、役割を提示する必要のある状況の外にいる時には、人は素晴らしく幸せで、自然と自分の定

だと思っているんだ？

義がなくなっていて、人生に興味を持っていません。ものごとはあるがままです。衝動的に主張したり、抵抗したりすることがありません。これは無邪気で無我の、至福の状態です。

常識的には、人の幸福や健康、そして成功は、自分について持っている考えや思いや想像によって決まると思われがちですが、実はそうした考えや思いや想像を変えられる能力によって決まる度合いの方が遥かに大きいのです。アバターのようなテクニックを使ってそうした考えや、思い、想像を意図的にコントロールすると、人生に奇跡が起き始めます。

人にとってありがたくない経験の源は、しつこいアイデンティティーの自己なのです。経験を歓迎するかそれに抵抗するかは常に、経験をどのように解釈するかによって決まります。そしてその解釈はその出来事の印象をふるいにかけているアイデンティティーによって決まるのです。同じ経験をしても、その人があるアイデンティティーの時には歓迎され、別のアイデンティティーの時には抵抗されることもあるのです。以前は嫌いだったものを好きになったという経験をしたことはありませんか？

アバターが登場するまで、しつこいアイデンティティーの自己をどれくらい修正できるかは、出来たとしても人によって、またテクニックによってかなり大きなバラつきがありました。多くの自己開発の方式、宗教、そしてセラピーは、何が問題かを理解していました。しつこいアイデンティティーを変えればその人の人生も変わるのです。方式の中には時々効果を発揮したものもありました。方式の中には古いアイデンティティーの上に新たなしつこいアイデンティティーをかぶせてしまうことで、ものごとを悪化させるだけのものもありました。時には修正されたという見せかけが装われたこともありました。社会的に賛同を得て優位に立つために、経験に新しい解釈を加えた振りをしてはいなくても、内心では本当は何も変わっていませんでした。庶民的な言いまわしをすれば

「牝牛の背中に鞍をつけることができたとしても、それでケンタッキー競馬に出ようとするな」というわけです。

実際には、人は意図的なアイデンティティーが創造できるようになる前に、まずはしつこいアイデンティティーの自己を超える必要があります。それがどれくらい難しいかは、二つのことのみにかかっています：第一は、しつこいアイデンティティーの自己が変化という可能性をどれくらい許したり受け入れたりすることができるかです。第二は、「お前は自分を一体何様だと思っているんだ？」と他人が言い張っても、自分を変えないままでどれだけ耐えられるかです。

・・・人の幸福や健康、そして成功は、
自分について持っている考えや思いや想像によって決まると思われがちですが、実はそうした考えや思いや想像を変えられる能力によって決まる度合いの方が遥かに大きいのです。

アイデンティティーは、それを建築した人にしか上手く修正できないという珍しい構造もっています。どんなに他人が叩いてみようと説得しようと、持続性のある結果は得られません。それを建築した人の協力が必要なのです。これは建築した人が「私は間違いで入った建物の中で苦しむ借家人であって、自分にはその建物は全くコントロールできない」と思い込んでいる場合には、かなり大変な芸当です。その借家人は実はその建物を建築した人なのだと思いきや無理に言い張ってみたいところで、かえってその人の惨めさは増すばかりです。

しかし方法はあります：借家人に家の建て方を教えるのです！そこから始めます。これがアバターコースの第2部で教えることです。それは本当にとっても効果があるのです。